

天桂伝尊の「五位逐位頌」解釈 ——天桂著『洞上五位弁的』の注解書を中心として——

志 部 憲 一

山の作と曰う、強いて弁ずべからず』『五位弁的』（駒大図書館一二三・一一四五—三、一一丁、現漢文）とし、作者を確定していない。尚、この「五位頌」の作者問題については拙稿「『重編曹洞五位』について」（『宗学研究』第二卷下、享保六年（一七二二）刊、以下『五位弁的』と略す）で触れた。

この「五位頌」は偏正五位説の原典とも言える。禪門では特に有名であり、従来「五位頌」についての注解が多い。その理解は様々であるが、この「五位頌」解釈自体にその人の宗風も現れているようである。今回は天桂が如何に「五位頌」を解釈していたか、この点を天桂系統に属する人々の注解を参考にしながら検討してみよう。

しかし「五位頌」の作者に関しては洞山の作とする説も

あり、明確ではない。天桂自身も「洞山の所作、或いは曹

天桂伝尊の「五位逐位頌」解釈（志部）

天桂伝尊の「五位逐位頌」解釈（志部）

著『報恩編弁耕』⁽³⁾（駒大図書館—忽一一五八）が知られて
いる。父幼老卵（一七二四—一八〇五）は天桂の孫弟子で
あり、この『報恩編弁耕』は天桂著『報恩編』上中下三巻
についての注解書である。

また筆者所蔵の享保六年刊『天桂老人報恩編』⁽⁴⁾の行間に
は書き入れがかなり詳細にされている。ただ虫食い部分が
あり判読不可能な箇所もあるが、内容からしてかなり古い
形を伝えるものと思われる。ここではこの『書き入れ本』
も一応門下系統による『報恩編』上中下三巻の注解書と考
えて置きたい。今回は以上の『五位弁的』と注解書二点を
参考資料としながら天桂及びその系統の「五位頌」理解を
考えてみたい。

まず天桂による「五位頌」第一位の「正中偏」解釈を検討する訳であるが、ここでは上段に『五位弁的』に示された「五位頌」のみを漢文のまま掲げ、その後に現漢文の天桂の解説の要点を書き下す。次の中段に父幼著『報恩編弁耕』、下段に享保六年刊の『書き入れ本』を掲げる。以上三本を参考にして天桂及びその系統の「五位頌」解釈の要点を検討してみよう。以下「偏中正」「正中来」「偏中至」「兼中到」の各位もこの形式に従つて問題点を探ることにしたい。尚略字や異体文字は引用の段階で、現行の文字に改めた。また句読点及び濁点は筆者。『五位弁的』の「五位頌」における「」は天桂の割り注。□は文字判読不可。
——は原文通り。……は省略の意。

天桂『五位弁的』

（駒大図書館所蔵）

正中偏、三更初夜月明前、莫怪相逢不相識
（顕訣に記に作る、尤も好し）、隱隱猶懷旧
日嫌

父幼『報恩編弁耕』

（駒大図書館所蔵）

三更一正中偏ト直ニ見ル見識ハ、三更カ
初夜カ、時刻ハ慥カニ知レヌ、月明ノ前
キニ而月モイマダ登ラヌ、頓ト生仏迷悟

享保六年刊『書き入れ本』

（筆者所蔵）

正一偏ト見タ人ノ見解ヲ云バ、三更乎初
夜乎、イ、ヤ何ニモセヨ月アカリセヌト
キゾ、此ハ什麼ノ時カノ、曹山ハ黑白未

（訣に妍に作る好し）

三更か初夜か、黑白未分、月明の前き、曹山の揃語に曰く、黑白未だ交わらざるの時に弁取せよ、又曰く只だ今はれ什麼の時節ぞと、此れ箇の時節子、久別の知己に逢う、

怪むこと莫れ、相逢て相記せずと、恰も忘却するに似て、其の人と言ひ難し、故に揃に曰く忘却せり、別揃に曰く作麼の劫中にか違却し来る、又曰く恁麼ならば則ち俱に手を拱しそ去らんと、然りと雖も隱々として猶旧日の妍を懷く、揃に曰く今日什麼をか奉重せん、又曰く恁麼ならば則ち自ら欺くこと得ずと、全く別人に非ず、当頭恁麼、切に忌む動著することを、動著せば則ち瞎婆露柱に撞著す……（中略）……旧日の知己に比して本来の父母に擬するのみ

見分ナイ、是何時節ゾヤ（先ハ非思量ノ

正中ジヤ）此時節ニ旧別ノ知己ニ相逢タガ、莫怪——那ノ劫ヨリカ久別ノ人ナレバ、其面影ゲ見タ羊ニハアレドモ、慥ニ其人ト名モ忘却シテ、記憶無キ故ニ、指レヌト云テ、必ズ怪ムナ、名ハ記憶セ子ドモ、從来共住ノ人ニシテ親見一回シタラバ別人デハナイ（爾ガ本来ノ父母ゾ）隠ト於保口ニ土古也羅、往昔那礼志竹馬ノ時ノ面影有テ藏レナイ、夫レ其人デ安ルゾ、是中的ヲ犯サヌ宗旨也

分ノトキ□云タ、

先ハ黑白未分ノウス暗ガリデモ、逢タハ決定ジヤ、必久フ別レテ無始劫來ト云呈ナレバ、逢テモ識ヌ杯ト云テ怪ムコトデハナイ、

成皇昔シドコヤラデ逢タ羊ナガ、然ドモ此ハソンゼウ夫レジヤト決定見届ケラレヌ、ドコヤララボロニ嫌疑ガハレヌ、ナゼナレバ、未ダ離功勲辺ノ事ノ故ニ、昔日迷地ノ疑ガ止ヌ、何呈久フ逢イデモ氣ヅカイスルナ、指寄テ一度親見一回シテ名乗逢テ見タラバ別人デハアルマイ、夫リヤ迷ヌ你ガ本来

天桂五位説の基本姿勢をまず概観してみよう。天桂は江戸期において刊行された『重編曹洞五位』（一六八〇）を重視した。そして『五位弁的』の「五位の大意」中で、五位の列次を「正中偏」「偏中正」「正中来」「偏中至」「兼中到」

と述べた。これは『重編曹洞五位』の「逐位頌」の列次にならつたものである。また「兼中到中心説」を主張した。

当時の時代背景をみると、まず「正中来中心説」が、明末曹洞禪者の永覺元賢（一五七八—一六五七）等によつて唱

天桂伝尊の「五位逐位頌」解釈（志部）

えられた。永覺の五位説は「正中來中心説」を導く為に「五位頌」の第四位を「兼中至」とするものであった。

天桂はこれを五位異説として斥け、「偏中至」及び「兼中到中心説」を唱えたのである。このように天桂の『五位弁的』は一応從来の五位異説を斥け、洞山・曹山の創唱した五位の原点に戻ろうと企図したと言える。

特に天桂が正統五位説の規範としたのが『重編曹洞五位』と曹山の『君臣旨訣』、後曹山了悟大師慧霞（生没年不詳）の『五位顯訣序略』、丹霞子淳（一〇六四—一一七）の『五位総序』の三者の説である。この点は後に触れるところにする。

五位説は「正」と「偏」との両者で世界の一切を表現するもので、その一体性を「中」や「回互」の語を用いるのが基本と言える。天桂はこの「正」と「偏」の一体性について洞山『五位顯訣』の有名な冒頭文を引用している。それは次のようにある。「正偏は顯訣に云く、正位却て偏、偏に就いて弁得すれば、是れ両意を円かにす、偏位、偏と雖も亦た両意を円かにすと」『五位弁的』（一丁）。また曹山の『君臣旨訣』を引用し、「正位は即ち空界、本来物な

し、偏位は即ち色界、万像の形あり」『同上』（五丁）と述べている。つまり「正」と「偏」は「空」と「色」の関係としても示されている。まず天桂は洞山・曹山の言葉を用いて「偏」と「正」との基本的立場を示しているのである。それではこの「正」と「偏」を結ぶ「中」とは如何に説明されているであろうか。天桂は特に「兼中到中心説」を唱えたが、この「中」と「兼中到」と同義と示すのである。それは次のようである。

此の中は曹山の所謂る、中を犯すことを欲せざるの中にして、辺表無きの中、本然不動、名の名づく可き無く、曾て変易無く、強いて名づけて中と曰う、正、正と雖も却て偏、偏、偏と雖も却て正、両位を円かにするの字も、亦た是れ箇の中の義、便ち兼到の一位なり、畢竟五位共に中を犯すことを欲せざる為の故に、権りに施設する所

『五位弁的』（一一丁）

この「中」を「兼到の一位」つまり「兼中到」と同義とする視点は別の箇所でも述べている。それは天桂の説示の矛盾点に対してされた質疑応答の中で触れている。この問題に関しては拙稿「天桂の五位思想」—『洞上五位弁的』に

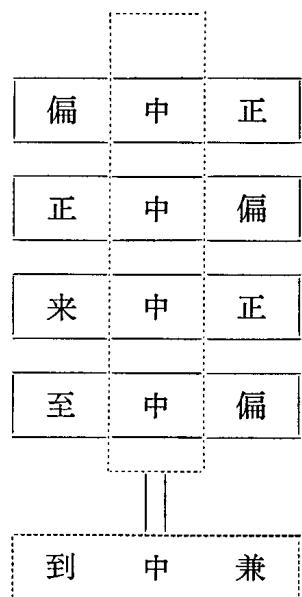
ついて一（『曹洞宗研究員研究紀要』第十七号、昭和六年）で触れたが、要点を再説してみよう。

天桂は五位各位の関係について一方で「凡そ四位皆兼中到にして兼中到の四位なり」『五位弁的』（三丁）と述べてある。ところがその一方で明確に「兼中到」の優位を説くのである。それは曹山の「兼帶は冥に衆縁に応じて諸有に墮せず、染に非ず淨に非ず正に非ず偏に非ず、故に曰う虚玄の大道無著の真宗、從上の先徳此の一位を推して最妙最玄とす」『五位弁的』（五・六丁）や後曹山了悟大師慧霞の

「相兼帶し来て有無に涉らず、頓に賓主を亡ず、偏にあらず正にあらず、至妙至玄」『五位弁的』（六丁）等の語を根拠にして、「兼中到」を重視し、「兼中到」と他の四位の区別を主張しているのである。天桂の五位説が「兼中到中心説」と言われる理由がここにあるのである。しかしこの前後矛盾する記述について天桂は質疑応答の形で次のように述べる。

有るが難じて曰く、前に四位皆兼中到にして兼中到の四位と言う、今前の四位なる者に甄別すと言うは何ぞや、

天桂伝尊の「五位逐位頌」解釈（志部）



前半の質問の「前に四位皆兼中到にして兼中到の四位と言う」の語と、その答え「前は中の字を以て言を為すなり、中は兼到の円位を指す」から天桂の説明する五位各位の関係を図示すれば次のようになる。

『五位弁的』（九丁）

天桂伝尊の「五位逐位頌」解釈（志部）

天桂は「正中偏」「偏中正」「正中来」「偏中至」の四位は皆「中」の字に統一されるが、この「中」は「兼到位」つまり「兼中到」を指すとしたのである。文中の「四位皆一位なり」の「一位」は「兼中到」を意味している。そして「兼中到」と四位との同一性を主張しながら「兼中到」を重視すべきと指摘した理由について「今且らく兼の字を以て前の四位に甄別して、その由て来る所を見せしめるのみ」と説明している。つまり各位を統合するところの「兼中到」を他の四位と区別し、その四位が兼中到に由来することを明示したとする。

以上天桂の述べる「正」と「中」と「偏」との関係を窺つた。ここでの「正」と「偏」とは、前述した曹山の「正位は即ち空界、本来物なし、偏位は即ち色界、万像の形あり」によって定義されている。つまり「正」は「空界、本来物なし」であり、「偏」は「色界、万像の形あり」である。そして更にこの「正」と「偏」の両者が「中」によって連結されている。この「中」とは「兼中到」のことであるとされる。^⑦

それでは「五位頌」各位が如何に解説されているか。ま

ず「正中偏」についてその要点のみを検討してみよう。天桂は「正中偏」について「正中偏は正に在るの偏、正を曰え巴則ち偏その中に在り、是れ正中偏の偏中正也」『五位弁的』(三丁)と述べている。これは一応「正」の側に比重を置いて述べたものである。上記で「正を曰え巴則ち偏その中に在り」と説明しているように、「正」と言った場合、そこには必ず「偏」が付随しているというのである。

この「正中偏」は「正」の側に比重を置いた見方であるが、この点について父幼著『報恩編弁耕』と『書き入れ本』の「正中偏」についての「註記」をいくつか参考に挙げてみよう。

(1) 無性ノ縁起、無為ノ差別ナリ『報恩編弁耕』(四丁)

(2) 正中偏……無性ノ縁起トモ非思量ノ思量トモ云可

シ『同上』(七丁)

(3) 今日迷ント知タ時ヲ正中偏ノ眼目ト云也、一切時処
自心ノ所現ト見タ『同上』(一〇丁)

(4) 那辺空界無物ノ正位ヨリ山河大地差別ノ相ガ顯ル故

ニ偏ナリ『書き入れ本』(一丁)

(5) 無為ヲ以テ差別有ト見テ『同上』(五丁)

(6) 迷ン無物ノ自心ガ万法流縁『同上』(六丁)

(7) 十界正中偏ニシテ別法ハナイ自心ノ所現ジャ『同上』(一四丁)

ここに見られるように「正中偏」では「正」の側に力点を置いた見方をしているのである。「正位」の空界を念頭に置けば、今目前に顕現している差別世界も空を背景としたものと理解することが出来るとしている。上記の(1)にみられる「無性ノ縁起」は実体の無い「無性」に視点を置いて、差別の縁起の世界を捉えたものといえる。天桂及びその系統は「縁起説」を重視していたが、この偏正五位説解釈にもかなり「縁起説」を用いているのである。また(7)でも自心(正位)に重点が置かれ、十界(偏位)も自心の所現として捉えられている。一方「偏中正」はこれと全く逆の視点となる。この「偏中正」については次で触ることにする。

さて天桂は「正中偏」第一句の「三更初夜月明前」について「三更か初夜か、黑白未分、月明の前き、曹山の揃語に曰く、黑白未だ交わらざるの時に弁取せよ、又曰く只だ今はれ什麼の時節ぞ」『五位弁的』(一四丁)と解説している

天桂伝尊の「五位逐位頌」解釈(志部)

る。

この分明ならざる状態を『報恩編弁耕』では「頓ト生仏迷悟見分ナイ」とし、『書き入れ本』では「頓ト生仏ス暗ガリ」とする。この「三更初夜月明前」の句は「正中偏」の大意を表現したものと見ることができる。この「正中偏」に限らず他の「偏中正」「正中来」「偏中至」「兼中到」の第一句も共に各位の大意をあらわしているのである。江戸期にこの第一句を「月明以前」の真暗闇(正位)と捉える見方があつたが、これに反対する意見が天桂の孫弟子の玄楼奥龍(一七二〇~一八一三)によつて出された。それは「月明前」の「前」の語を「面前」「風前」の様に、物の正面と捉え、月明かりのうす暗がり(正中偏)と見るべきとする意見である。夜の暗さを「正」とし、月の明かりを「偏」とする見方で、「正」と「偏」の混在した様子(正中偏)を表現しているとした。

(1) 偏中正

ここでは父幼著『報恩編弁耕』の「此ノ位ハ縁中会ト云リ、諸法縁起即無性也」の説明に注目してみよう。「縁中

天桂伝尊の「五位逐位頌」解釈（志部）

天桂『五位弁的』

偏中正、失暁老婆逢古鏡、分明覲面別無真
休更〈顛訣に争奈に作る、好し〉迷頭還認影
失暁老婆古鏡に逢うとは、失暁は猶破暁のご
とし、夜将に曙んとして未だ暁ざる時なり、
老婆は功勲の粉飾を著けざるに比す、古鏡は
払拭の修治を仮らざるに擬す、此の頌本と楞
嚴演若の典故に援拠して、經意と稍異なり、
夜將に曙んとして、未だ暁ざるの時、老婆忽
ちに古鏡に逢うときは、眉目妍媸見るべき無
し、……（中略）
形影俱に鏡上の幻塵、鏡を打破し来れ汝と商
量せん、故に策進して云く、争奈せん頭に迷
て還た影を認めることを、揃に曰く、影を認めること
莫んば即ち是と、何ぞ鏡を以て本頭を照鑑
するに堪んや、又揃に曰く、影を認めること
莫れ、這裏直下に能く見得透せば、則ち形影
本来全く面目なし

父幼『報恩編弁耕』

此ノ位ハ縁中会ト云リ、諸法縁起即無性也（思量非思量、今日脱体無物ナリ）、失曉——暁ント欲シテ、分明ナラヌ頃ヒ、功勲修正ノ粧ヒナイ老婆子ガ、払拭琢磨ニ預ラヌ古鏡ニ対シテ対スルハ、対シテガ眉目妍醜ノ見ル可キ無イ、是偏ノ色界直ニ正ト見ル眼也、分明——夫ノ面目ノ見ル可ナイ、正恁麼ノ処、却較些子直真実体ジヤ、若妄ト云イ、真ト云可キヲ見出サバ、猶是鏡上ノ影坊子ゾ、争奈——然レドモ多ノ人ガ自己ノ本頭ニ迷テ、生仏迷惑菩提煩惱種々鏡中ニ影ヲ認メ把捉スルハ、争——セン笑止千万ト也、洞上門下迷惑ノ光影ヲ認著セヌコトゾ、本然無物不動地ノ的トヲ見外スナ、

享保六年刊『書き入れ本』

先ハ替タ者ニ逢タ事ジヤ、未天暁無分曉ノ時分ニ、朦朧タル老婆ガ古イ鏡ニ向タト云ハ、一切功勲ノ色辺ヲ借ラヌ、ナゼナレバ偏即正ジヤカラ、イ、ヤ古鏡ニ向タト云ヘバ、何ヤラ影ガアル羊ナガ、親見一回シテトツクト見ヌケレバ、別ニ真底ノ見ベキナイ、ナゼカノ、尽ク鏡上ノ幻影ニシテ、□□影スラササヌ、然トモ争奈迷頭——鏡上ニ現ズルハ本来本頭ニ非ルコトヲ知ラズニ、影象ヲ把捉シテ脱体現成スルコトヲ知□□非モナイゾ、イヽヤ如是ト云モ早影ヲ認タ、諸仁者必ズ影ボウシトスマフトルナ、脱体現成不迷

「会」とは曹山が「偏中正」について説明した語である。これは「偏中正、揃に云わく、縁中に会せよ」(『重編曹洞五

漢文）として示される。これは万物衆縁中において正位を

知るべきとするもので、次の「諸法縁起即無性也」『報恩編弁耕』の説明に通じる。縁起によつて生じた万物をそのまま無自性・空と理解するのである。

「正中偏」の時と同様に父幼著『報恩編弁耕』及び『書き入れ本』の「偏中正」に関する注解を参考に挙げてみよう。

(1) 縁起無性也、那辺エ向去也『報恩編弁耕』(四丁)

(2) 万法ノ色界即無性也『同上』(四丁)

(3) 色界万象ノ偏ハ迷地ナレドモ、縁起無性ト知ラバ悟

也『同上』(九丁)

(4) 今日縁起スル処ヲ不生ト知『書き入れ本』(五丁)

(5) 色界万象ガ即空界無物正位ゾ『同上』(六丁)

ここに示されているように「正中偏」が「正位」に力点を置いているのに対して、この「偏中正」は「偏位」つまり

縁起によつて生じた存在物に力点が置かれている。まず縁

起により生じた諸法に焦点を置き、その背景にある正位・

無自性・空の世界を読み取るのがこの「偏中正」の位といえる。天桂系統が五位説解釈に「縁起説」を用いたことについては既に触れた。

さて前述したようにこの「偏中正」の第一句でも、「正中偏」と同様にこの位の大意、つまり「偏」と「正」との回互を表現しているようである。天桂は「夜将に曙んとして、未だ暁ざるの時、老婆忽に古鏡に逢ときは、眉目妍媸見るべき無し」『五位弁的』(一五丁)と述べたが、さらに父幼著『報恩編弁耕』では「失曉——暁ント欲シテ、分明ナラヌ頃ヒ、功勲修正ノ粧ヒナイ老婆子ガ、払拭琢磨ニ預ラヌ古鏡ニ対シテ対スルハ、対シテガ眉目妍醜ノ見ル可キ無イ、是偏ノ色界直ニ正ト見ル眼也』『報恩編弁耕』(一〇一丁)と説明している。これを要約すれば「失曉老婆逢古鏡」の「失曉老婆」を「偏」とし、また「古鏡」を「正」とする視点となるであろう。父幼が「偏ノ色界直ニ正ト見ル眼也」と明確に指摘するように、第一句は「偏中正」の大意を表現したものであろう。

ところで天桂は「正」と「偏」との回互を基本とし、「正中偏」即「偏中正」とする。二位を一体とみるのである。この点をさらに「向去」「却来」の語から窺つてみよう。まず「正中偏」は空の視点で現象界を捉えるのであるが、天桂は前述したように「正中偏は正に在るの偏、正を曰え

天桂伝尊の「五位逐位頌」解釈（志部）

ば、則ち偏その中に在り、是れ正中偏の偏中正なり」『五位弁的』(三丁)と説明している。また「偏中正」は差別の側から空を知る視点であるが、天桂は「偏中正は偏に在るの正、偏を曰えば、則ち正その中に在り、是れ偏中正の正中偏なり」『五位弁的』(三丁)と二位の一体性を説明している。つまり文中にある「正を曰えば則ち偏その中に在り」とは「正位」に比重を置いた視点であり、また「偏を曰えば、則ち正その中に在り」とは「偏位」に視点を置いた立場である。これは「正」(空界)の側から「偏」(差別)を見るか、あるいは逆に「偏」の側から「正」を捉えるかの相違のみで結局同じことになる。二位一体といえる。偏正五位説では更にこの比重の置き方の相違を「向去」「却来」の語で表現している。この「向去」とは「正に向かって偏を去る」であり、「却来」とは「正を却いて偏に来る」『報恩編弁耕』(三丁)の意であろう。

天桂の「向去」と「却来」の説明『五位弁的』(三丁)は次の四つに分類できる。

(1) 正に至るの偏にして、正中に偏有るときは、向去の正中偏、向去の正中来、偏中至なり



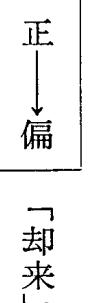
(2) 正より偏に来て、正中、偏に在るときは、却来の正中偏、却来の正中来、偏中至なり



(3) 偏より正に至て、偏中、正に在るときは、向去の偏中正、向去の正中来、偏中至なり



(4) 偏に来るの正にして、偏中に正有るときは、却来の偏中正、却来の正中来、偏中至なり



以上のように天桂は「向去」「却来」を大きく四つに分類して論じている。「正中偏」「偏中至」等に、それぞれ「向去」「却来」の別があると主張しているのである。この説明はやや煩瑣であるが、「正偏上」における比重の置き方の違いを「向去」と「却来」で一応説明しているよう

である。

ところで天桂はこの「偏中正」の説明の一一番最初に「丹霞曰く、偏、偏に坐せず、天暁陰晦是なり」『五位弁的』（一五丁）と述べている。これは「天暁」（偏）と「陰晦」（正）で偏正回互を表現したものであるが、前述したように天桂の五位説は『重編曹洞五位顕訣』を基本としている。

また個人的には曹山と後曹山（慧霞）及び丹霞の三者の五

位説を高く評価した。^⑩しかも「如上三師の語に依るときは、五位の排列已に分明」『同上』（七丁）や「前曹山、後曹山、丹霞三師の意に違去することは何ぞや」『五位弁的』（八丁）として自説の論拠としているのである。

（三）正中來

まずここでは『報恩編弁耕』の注解文、「此位古來說ト

天桂『五位弁的』

正中來、無中有路出塵埃、但能不触當今諱、
也勝前朝斷舌才

無中に路有り塵埃を出ずとは、無中は空界無
物の位を指す、路は正偏に來至するの途路な
り、……（中略）……此の出の字は
越也の訓にして、超出の義なり、出入の出に
是非ざるなり、路無中に在るときは、正來底
の活路にして、自ずから是れ今時塵埃の境に
超出する同中の異路にして、途を同じて轍を
同ぜざるなり、曹山の揃に曰く、無句中の有
句、……（中略）……言言宗を円か
にし、舌頭骨なし、句句玄を帶びて、有無に

父幼『報恩編弁耕』

（此位古來說ト異也）老人ノ時ハ正中偏
と同ジコトニシテ人位ニ就テ説耳、人々
正中來底也ト、本来迷ヌト云本智現前ノ
機也、無中——本来動カヌ正——底ト知
テ見レバ、日用光中那辺ノ無中ヨリ却来
シ（正—偏也）向去シ（偏中正也）百千
万億ノ転身、正偏往来路有テ通達無碍、
然モ正中ノ転路ユエ、塵埃ヲ超出シテ、
凡聖ノ塵坑ニ混隨セヌ、是ヲ今時ニ墮セ
ヌト云、旧時人不踏今時路、正位來底ノ
發機也、但能——如是元來一ノノヘノ惹
可ナク、一言半句の可説無キト知タ人、

享保六年刊『書き入れ本』

先向去デモ有レ却来デモアレ、正中來ト
見タ來ノ機ヲ云ハゞ無中有路——正位空
界無物中ノ場処ニ一条ノ活路ガ有、其ノ
路頭ハ今時一切ノ諸界ヲ超出シテ、シカ
モ正偏ニ來至スル却来ノ道筋ジャ、此三
世諸仏祖師モ一度ハ渡ラ子バナラヌ、扱
テ此正—來底ノ人ハ但能不—言々宗ヲ円
ニシ來テスッキリ當今ノ諱ニフレヌ、此
ハドウシタモノ言イゾ、正位來底ノモノ
云イニシテ、何ヲ云モ語中無語、此ヲ四
十九年一字不説ト云、又無舌人ノ解語ト
云、アルカラ此デハ前朝断——イカナ夫

天桂伝尊の「五位逐位頌」解釈（志部）

滞らず、是を無舌人の解語と謂う、四十九年
一字不説も亦た是なり、故に云う、語中に語
有るは死句と、斯の如きときは但だ能く当今
の諱に触れず、……（中略）……是
れ則ち語中に語なきの活句にして、也た前朝
隋の李知章が断舌の才に勝る、揃に曰く、黙
に非す、別揃に曰く、終に歎を切らす

二義門中ニ在テ 〈有語中無語、無語中有
語〉 横説堅説而当今ノ諱ニ犯サレヌ、是
ヲ無舌人ノ解語ト云也、勝——隋ノ李知
章ニモ勝テ、言天下ニ満レドモ、敢テ口
過無イ、夫耳デナイ、入驢胎入馬腹、不
可思議ノ妙用アルコトゾ 〈丹霞淳云吾宗
有語句、金刀研不開是也〉

異也）老人ノ時ハ正中偏ト同ジコトニシテ人位ニ就テ説
耳」に注目してみよう。天桂は既に検討したように五位各
位の同一性を主張している。五位即一位、一位即無位、無
位即幻位の主張が天桂の基本といえる。この五位即一位に
おける「一位」は「兼中到」である。また「正中偏」と
「正中来」及び「偏中正」と「偏中至」との関係について
次のように説明している。

正中来は是れ正より偏に来るの位、正中偏の偏の字を
転じて、來の字と作して、学人所見の差を分かつ、來
の字暗に偏の字を含む、即ち是れ二位同中に異を弁ず、
正中偏は且らく法に寄せて以て位を立つ、正中来は且
らく人に就いて以て位を立つなり、偏中至は是れ偏よ
り正に至るの位、偏中正の正の字を転じて、至の字と

作して学人所見の差を分かつ、至の字暗に正の字を含
む、是れも亦た二位同中に異を弁ず、偏中正は且らく
法に寄せて以て位を立つ、偏中至は且らく人に就いて
以て位を立つなり

『五位弁的』（四・五丁）

天桂は「正中偏」と「正中来」の同一を主張し、更に「正
中偏」を法の側、「正中来」を人の側の位と説明している。
また「偏中正」と「偏中至」も同様に、「偏中正」は法の
側、「偏中至」は人の側の位とする。この関係を図示す
れば次のようになる。

(1) 「正中偏」(法の側) (2) 「偏中正」(法の側)
=

(3) 「正中来」(人の側) (4) 「偏中至」(人の側)

ノ段デハナイ、断舌ノ才ニモ勝タ、如來
不可思議ノ廣長舌相ジヤ、此ヲ涅槃經ニ
ハ如來無所說ノ本時ト云タ、自心仏知見
ヲ開發スルトキハ、正偏來至ノ路有テ迷
悟凡——ヲ元ヨリ超出シテ居ル也

抑天桂は「夫れ偏正五位は宝鏡三昧重離の章より出で来て、学人の所見を驗弁する者なり」『五位弁的』（一丁）と述べ、偏正五位説自体を学人の所見を試験するものとしている。つまり学人の力量によつて五位それぞれの位が設けられてゐる所とし、五位説を驗弁思想とみてゐるのである。

『報恩編弁耕』に記述された「此位古來說ト異也」老ノ時ハ正中偏ト同ジコトニシテ人位ニ就テ説耳」の「老人ノ時ハ…」とは、天桂が「正中偏」即「正中來」とその同一性を主張し、「正中偏」を法の側、「正中來」を人の側の位と説いてゐる点を指してゐると思われる。

また天桂は「正中來」について「言わば人人心上本智現前の時を、之を來の機と謂う……〈中略〉……正覺顯現有情非情同時成道の時節子なり」『五位弁的』（一五丁）と述べ、学人が正覺を成就した時の位としている。上記でいえば（3）「正中來」（人の側）ということになる。

さて「五位頌」は「正中來、無中有路出塵埃、但能不触當今諱也、勝前朝断舌才」であるが、これについての天桂の解説を窺つてみよう。まず第一句について「無中は空界無物の位を指す、路は正偏に來至するの途路なり、塵埃を

出るの出の字……〈中略〉……此の出の字は越也の訓にして、超出の義なり、出入の出には非ざるなり、路無中には在るときは正來底の活路にして、自ずから是れ今時塵埃の境に超出する、同中の異路にして、途を同じて轍を同ゼざるなり」『五位弁的』（一六丁）とする。

上記に見られるように『報恩偏弁耕』では「正偏往来路有テ通達無碍、然モ正中ノ転路ユエ、塵埃ヲ超出シテ、凡聖ノ塵埃ニ混隨セヌ」と説明している。以上のように、第一句では正偏上の路を自由に往来する人、つまり正覺を成就した人の在り方と説明している。

また第二句以降も「言言宗を円かにし、舌頭骨なし、句句玄を帶びて有無に滞らず、是れ無舌人の解語と謂う、四十九年一字不説も亦た是なり、故に云く語中に語有るは死句と、斯の如きときは但だ能く当今年諱に触れず」『五位弁的』（一六丁）とし、正覺を成就した人の言語の融通無碍を示したとする。いずれにしてもこの「正中來」の位は「人の側」の問題として取り扱われている。

天桂伝尊の「五位逐位頌」解釈（志部）

(四) 偏中至

天桂『五位弁的』

偏中至、両刃交鋒不須避、好手猶同火裏蓮、
宛然自有衝天氣

心識了然として、曾て誤錯せず、偏中に正有り、偏中、正に在りと見得して、以て回互円転して向去却来するの機、有語中の無語なり、両刃鋒を交え避けるを須いずとは、曹山の揃に曰く、主客相触れず、又曰く、箭箭相挂え、脈脈断ぜずと、師学相見両刃鋒を交え、全く回避せず、能く手を傷らず、妙中に円転して偏枯に墮せず、之を好手猶火裡の蓮に同じと謂う、曹山の揃に曰く、壞すことを得ず、又曰く、誰か是れ便を得る者と、全く他に靠倒すること勿れ、宛然として自ずから天を衝く氣有るは、宛然は依然のごとし、又分明の義、須らく是れ人人從來天を衝く氣有て、如來の行處に向かつて行くこと莫るべし、揃に曰く人より得るにあらず、又曰く、

父幼『報恩編弁耕』

享保六年刊『書き入れ本』

両刃——師學相見之上、功勲ノ偏位ニ在テ生涯ヲ喪尽シ、機發シテ、偏中、在正〈向去也〉偏中ニ有正〈却來也〉ト回互ノ宗乘ヲ見徹シテ、円転ニ作用スル時ハ、師學ノ両刃互イニ偏正ノ鋒ヲ交テ、君臣師學賓主相避ヌ、有語中無語、無語中有語、箇々転処ニ立在シテ、何レモ片タ落ヌコト、間ニ不容髮、此ノ中ニ主賓ノ妙中ニ円転シテ、石火電光ノ如キ、是ヲ好手々中好手ト云、宛然自——上如□ニ火裡ノ蓮花、希有難思儀也、宛然——如此事宛一ト分明兒、人々本ヨリ明カニ、鼻孔リニ氣ヲ通ジテ他ノ力量ヲ借ラヌ、鐵漢衝天ノ氣、木人分際ノ行李也、ホドニ迷タリト分別シテ如來ノ行處ニ向テ行

クナ

此ハ功勲邊ノ偏位ニ有テ云タ者ゾ、今日偏位ヨリ修行功勲ノ生涯ヲ尽シモテ往テ、正位ニ向テ往クトキンバ、両刃——師學ノ両刃、偏正ノ鋒ヲ交ヘ箇ヶ立在転□シテ毫釐モ避コトヲ用□□、上如是不触不犯、互ニ好手ノ出逢ハ火裏如蓮——イカサマ希有難思議ノ出逢ジヤ、此ヲ好手々中呈好手ト云、宛然自——上如□ニ師學トモニ向去ノ氣ガイ有テ勵クトキハ、一念初発心ノ心ガ直ニ衝天ノ氣ニシテ、如來ノ不往行處、夫々モ冲天ノ氣アル□□ジャ呈ニ、必ズ他ニヨセカクナ、人々各々衝天ノ氣アル也

怎麽ならば則ち借りらず、別據に曰く、本有に
非ずと、又是れ諸人的作麼生

前述した通り、天桂は「偏中正」と「偏中至」との二位について、「偏中正」の「正」の字を改めて「至」と為し、二位同一を主張している。しかも「偏中正」は法の側、「偏中至」は人の側から説いたとする。

さてこの「偏中至」において天桂は「心識了然として、曾て誤錯せず、偏中に正有り、偏中、正に在りと見得して、以て回互円転して、向去却来するの機」『五位弁的』（十二丁）と述べ、人の側の問題として人格上で説いている。この点は「正中來」と同じである。「偏中正」の箇所で検討した「向去」「却来」の分類に従えば、文中の「偏中に正有り」とは却来の「偏中至」であり、「偏中、正に在り」とは向去の「偏中至」となるであろう。

また上記で『報恩編弁耕』が「功勲ノ偏位ニ在テ生涯ヲ

喪尽シ、機発シテ、偏中、在正（向去也）偏中ニ有正（却来也）ト回互ノ宗乘ヲ見徹シテ、円転ニ作用スル時」と説明しているが、これは偏位における法の成就を意味している。これは前述の「偏中正」の例でいえば、万物衆縁中に

正位を含む事を知ることで、縁起によつて生じた万物をそのまま無自性・空と理解する立場であろう。

「偏中至」の第一句は「両刃交鋒不須避」であるが、天桂はこの句の前半「両刃交鋒」について「師学の両刃偏正の鋒を交えるの義なり」『五位弁的』（五丁）と説明している。『報恩編弁耕』も『書き入れ本』も同じく「師学の両刃、偏正の鋒を交える」の意としている。天桂はこの第一句をまず偏正回互の意味とし、しかもその正偏回互の様子について「曹山の揃に曰く、主客相い触れず、又曰く、箭箭相い挂え、脈脈断ぜずと、師学相見両刃鋒を交え、全く回避せず、能く手を傷らず、妙中に円転して偏枯に墮せず、之を好手猶火裡の蓮に同じと謂う」『五位弁的』（一七）八丁）として説明しているのである。

ところでの「偏中至」の第一句は「偏中至説」と「兼中至説」との関係で少し問題となつてゐる。天桂は「朝宗の所謂る、如し覺範の偏中至に依らば、則ち一刀なり、以て両刃鋒を交えると名づけずと、此の説固に当たらず、凡

天桂伝尊の「五位逐位頌」解釈（志部）

そ偏を曰えば、則ち正有り、正を曰えば則ち偏有り、一を挙げて全く收む』『五位弁的』（四丁）とし、中国臨濟宗の覺範慧洪（一〇七一—一二八）が主張した「偏中至説」を批判した朝宗通忍（一六〇四—一六四八）を攻撃している。

五位史上の問題点の一つに「五位頌」の第四位を「兼中至」とするか「偏中至」とするかの論争があった。通忍は「偏中至」を偏位の独立として捉え、「覺範の偏中至に依らば一刃なり、甚んの鋒を交えるとか説かんや」『五位弁的』（二丁）と述べている。つまり「両刃交鋒不須避」とする「五位頌」を根拠に「〈偏正〉兼ねて至る」『五位弁的』

（五）兼中到

天桂『五位弁的』

兼中到、不落有無誰敢和、人人尽欲出常流、
折合還（僧宝伝に終の字を作る、尤も好し）
帰炭裡坐

有無に落ちず、誰か敢えて和せん、揃に曰
く、當頭せずと、只だ箇の一位、言の容れる

父幼『報恩編弁耕』

兼ハ円字ト同ジ、自心本然不動不变也、
到ハ今到ルデナイ、本覺本得久遠成ノ宗
旨也、故ニ此ノ位ハ、本来離名状、天真

有ト云ハ色界形像等也、形アル故、無ト
云ハ空界寂滅ニシテ無物、先ズ何ニモセ
ヨ有ニモ落ズ、無ニモ落、最玄最妙ノ仏
音ジャ、イヤ此ノ曲調ハ三世三劫ノ仏祖
モ、イカナコト唱和スルコト成ヌ、イ、

享保六年刊『書き入れ本』

（二丁）意味としての「兼中至説」を主張しているのである。
また朝宗と同じく「兼中至説」を主張した人に、中国禪宗界の永覚元賢（一五七八—一六五七）がいる。永覚は「正中来中心説」を導く為に「兼中至説」を主張した。しかし天桂は『五位弁的』で永覚と朝宗の両者を批判した。今日この永覚や朝宗等の主張した「兼中至説」は五位異説とされるが、当時は永覚も有名であり「兼中至説」はかなり有力であった。尚この「偏中至説」と「兼中至説」の問題については前述の拙稿「『重編曹洞五位』について」で触れた。

可き無し、位の住すべき無し、有に非ず無に
非ず、最妙最玄、誰と共にか唱和せん、無舌
人をして解語せしむ、須らく無耳底にして始
めて聴くべし、到頭諱無く、曾て変易なき
を、強いて名づけて兼中到と曰う、洞山の曰
く、吾が間名已に謝すと正に是なり、人人尽
く常流を出でんと欲す、揃に曰く、什麼の出
頭の処か有らん、別揃に曰く、動すれば則ち
死す、又曰く、恁麼ならば則ち隨處快活と、
折合して終に炭裏に帰して坐す、別揃に曰
く、他を謾ずるを得ず、又曰く、恁麼ならば
則ち賴に是れ某甲を得ると、仏祖有てより已
降、人人尽く迷途の常流を出でんと欲す、功
勲に渉り修証を要して、その造道の極、玄微
を及尽して、帰り来て箕居して看れば、則ち
折合して終に炭裏に帰して坐す、土面灰頭、
家の坐すべき無く、世の興すべき無し、為復
誰とか名づけん………（中略）………
折合終に炭裏に帰して坐すの句、曹山の別揃
に曰く、他を謾ずることを得ずと、是に知り
ぬ、仏祖も亦た不識的人を頌して、以て此
の一位超仏越祖の極致なることを明かすのみ

玄ニシテ、偏正有無ノ二法ニ落ヌコト、
向上ノ一曲調、誰——唱和ハ誰デ有郎、
無耳人ニシテ唱和スル處ジャ、乍然尽界
此ノ曲ニ漏レタモノハナイ、人人——
弁道ノ者モ、始ニハ常流ノ迷ヲ出、見性
成仏ノ功勲ヲ立テ羊ト思フガ、修シ得テ
到——ラン結リハ炭一坂坐ノ炭焼坊子ト
成テ（紙子頭巾ニ繩ノ帶）家ノ可坐ナ
ク、世ノ可起ナイ、仏法ノ沙汰一点モナ
イ（カ、ラヌザマニナリ）果タ是ガ兼到
唱和ノ人カナ（沙門転身異類也）

ヤ諸人此曲ヲ聞タカ、無耳底ニシテ始聞
コトヲ得ン、先ズ夫レジヤガ、人々尽
タ心デ迷途ノ常流ヲ出ント要シテ苦心練
行スルコトジヤガ、其修行ノオンズメハ
ドウ仕舞コトジヤト□□、折合——
坊ト成タハ扱テモカ、ラヌ有様ト成タコ
トカナ、此ヲ十方絶比倫、先ハ仏法中ノ
暖氣一点モナイ

天桂伝尊の「五位逐位頌」解釈（志部）

天桂は「兼中到中心説」を唱えた。それは既に「正中偏」を説明する段階で紹介したが、たとえば曹山の「兼帶は冥に衆縁に応じて諸有に墮せず、染に非ず淨に非ず正に非ず偏に非ず、故に曰う虛玄の大道無著の真宗と、從上の先徳此の一位を推して最妙最玄とす」『五位弁的』（六丁）や後曹山了悟大師慧霞の「相兼帶し来て有無に渉らず、頓に賓主を亡ず、偏にあらず正にあらず、至妙至玄〈是兼中到也〉」『同上』（六丁）等の語を根拠にして、「兼中到中心説」を主張しているのである。

前述したように江戸期前半では永覺等が唱えた「正中來中心説」が有力であった。これは偏正五位説の第四位を「兼中至」とするものであった。これに対しても天桂は「重偏曹洞五位」に依拠して、「兼中至説」を斥け、「偏中至説」を唱えた。そして上記のように「兼中到中心説」を唱え反論したのである。天桂の「兼中到中心説」は江戸期の五位研究者として、かなり早い時期に出されたものであり注目すべきであろう。

次に天桂の「兼中到」の頌についての説明を窺ってみよう。天桂はこの「兼中到」の位について「箇の一位、言の

容れる可きなし、位の住すべきなし、有に非ず無に非ず、最妙最玄」や「此の一位超仏越祖の極致」と述べて重要視している。已に何度も触れた天桂による「兼中到中心説」の強調である。

また「五位頌」の第一句に「不落有無」とある。この意味も「正中偏」「偏中正」「正中來」「偏中至」の各第一句と同じく「正偏回互」を表現しているとされる。この点は『報恩編弁耕』の「偏正有無ノ一法ニ落ヌコト」や『書き入れ本』の「有ト云ハ色界形像等也、形アル故、無ト云ハ空界寂滅ニシテ無物、先ズ何ニモセヨ有ニモ落ズ、無ニモ落（ズ？）、最玄最妙ノ仏音ジャ」とする「有無超越」の説明がよく表している。

また天桂は第二句の「人人尽欲出常流」について「人人尽く迷途の常流を出でんと欲す、功勲に渉り修証を要して」とし、功勲の修行の段階とする。そして「玄微を及尽して、帰り来て箕居して看れば、則ち折合して終に炭裏に帰して坐す、土面灰頭、家の坐すべき無く、世の興すべき無し」と第三句に続いている。つまり天桂の修行の究極は「土面灰頭、家の坐すべき無く、世の興すべき無し」とす

る平凡な状況を示しているようである。

たとえば父幼の『報恩編弁耕』では「炭焼坊子ト成テ
〈紙子頭巾ニ縄ノ帶〉家ノ可坐ナク、世ノ可起ナイ、仏法
ノ沙汰一点モナイ」とされ、また『書き入れ本』でも「炭
頭土面ノナハ帶ビ在シモヨラン、炭焼坊ト成タハ扱モカ、
ラヌ有様ト成タコトカナ、此ヲ十方絶比倫、先ハ仏法中ノ
暖氣一点モナイ」と説明される。以上のように「兼中到」
の最後の句は、天桂系統では「仏法らしさ」や「仏法氣」
を除去したものとして理解されている。

天桂は江戸期になってから盛んに主張され出した「儀規
的修行」を否定し、「心の追求」を主張した人である。天
桂の仏道修行は「心の追求」という形で行われたといえる。
また天桂は随所で自身の「心の追求」の決着・成就を語っ
ているが、その到達点は「坐は則ち只だ坐なり、工夫猶用
いづ」『註六祖壇經海水一滴』(駒大図書一二一・一一六、
卷四、六丁) というように、かなり平易に語られているの
である。

以上のように天桂の修行の帰結とこの「兼中到」の「五
位頌」理解には共通性があるようである。天桂はこの「兼

中到」の第二句「人人尽欲出常流」を功勲の修行の段階と
し、また「折合還帰炭裡坐」を修行の帰結としており、そ
の理解も『報恩編弁耕』の「仏法ノ沙汰一点モナイ」に代
表されるであろう。尚天桂の儀規的修行否定については拙
稿「天桂伝尊における修行の意義」(『宗学研究』第三一号、
平成元年) 及び「天桂の形式的修行否定とその背景」—在
家成仏の可能性—(『曹洞宗宗学研究所紀要』第三号、平
成二年) で触れた。

おわりに

以上天桂系統の「五位頌」解釈を天桂の『五位弁的』、
父幼老卵の『報恩編弁耕』及び享保六年の刊記のある『書
き入れ本』の三本を参考資料として検討した。紙幅の関係
で細かい内容的検討は省き、天桂及びその系統の「五位
頌」解釈の基本姿勢を概観するに止めた。天桂の『五位弁
的』の注解作業は、洞山・曹山の五位説に比較的近いとさ
れる『重編曹洞五位』(一六八〇刊) の出現後である。天
桂は主にこの書に依拠して偏正五位説を開拓し、五位異説
とされる「正中来中心説」や「兼中至説」等を批判したの

天桂伝尊の「五位逐位頌」解釈（志部）

である。

偏正五位説は「偏」と「正」の一体性を「中」や「回互」の語句で表現するものであるが、この「偏」と「正」は「色」と「空」或いは「有」と「無」との関係にも置き換えられる。天桂及びその系統はこれらの関係を説明する為に「縁起説」を用いた。

天桂系統は江戸期において「因縁生説」「縁起説」を強調したことが知られている。また文中で触れたがこの「縁起説」は『正中眼藏』解釈の基本姿勢にもなっているのである。偏正五位説は今日余り主張されないが、中世や近世の曹洞宗でかなり盛んに宗義解釈に活用された。しかし徐々に易卦説の導入や恣意的解釈によつて煩瑣になり、今日殆ど顧みられないことは残念なことである。

〔註〕

① 天桂の『五位弁的』の冒頭によると、享保二年（一七一七）仲春に『碧巖録』を大衆に講義した。その第四十三則の「洞山無寒暑の話」に至った時、円悟克勤（一〇六三～一一三五）の評に「五位頌」があつた為に、衆の要請により「五位頌」解説をしたとされる。これが『洞上五位弁的』と題して『參

同契毒鼓』『宝鏡三昧金鏡』と共に『報恩編』に収録され、享保六年（一七二二）に刊行された。この『五位弁的』の構成内容は、まず冒頭に撰述由来が示され、次に「五位の大意」さらに「五位逐位頌」と次第する。『碧巖録』の円悟の評に対し、「此本則ヲ五位偏正ニ合テ云ハ不可ナリ、雪豆モソコヲ断ワレタ、円悟ノ評ノ中ニ正中偏偏中正附会セラレタハ未練ゾ、洞上ト云バ偏正ヲ以テセ子バナラヌ羊ニ云フハアシ、洞山モ權リニ五位ヲ設ケテ不得已、圈兒ヲ出サレタゾ、故ニ實有五位、是謗洞山ト云レタ」『碧巖集抵續鈔』（駒大図書一四一・三三十一）と述べ、型にはめた「五位説」の扱いに不満を示している。天桂の『五位弁的』の撰述は正統五位説の復古が目的とされたのである。

② 偏正五位説は中国禪宗史上において既に名称、位次、解釈等の異論を生じた。その理由として江戸期に刊行された『重編曹洞五位』（一六八〇刊）のような比較的洞山・曹山の五位説に近い書が中国本土に普及しなかつた事等が挙げられるであろう。勿論この『重編曹洞五位』にしても韓國僧晦然（一一〇六～一二八九）が中統元年（一二六〇）に「序」「補」を加えて再編したもので問題点も多く含んでいる。「逐位頌」の作者問題は五位研究史における大きなテーマとなつてゐるが、『重編曹洞五位』では「先曹山本寂禪師逐位頌」と題して、「五位頌」の作者を曹山と明記している。しかしこの韓國僧晦然の主張した「曹山説」も五位研究者の全面的

な賛同を得たわけではない。たとえば江戸期に五位研究者として活躍した円室紹介（※一六八一）や近年に『五位顕訣元字脚葛藤集』を著した岸沢惟安（一八六五—一九五五）等

が、それぞれ理由を挙げて洞山説を主張しているからである。曹山説の主な著作として『重編曹洞五位』『偏正五位図説詰難』『顕訣耕雲評註種月擴摭藁』等をあげることができる。

また洞山説の主なものは『禪林僧宝伝』『五灯会元』『天童覚和尚小參鈔』『雲月錄』『洞上古轍』『曹洞五位鈔』『管見錄』『不能語五位説』『五位顕訣元字脚』『人天眼目臆説』『洞山悟本大師語錄』等である。

③ 父幼著『報恩編弁耕』は天桂の『報恩編』上中下三巻の注解である。父幼老卵は天桂の法嗣であった無画鉄文の資であるが、師祖天桂の『正法眼藏弁註』を祖述して『正法眼藏那一宝』を著した。他にも『永平元禪師語錄弁解』『獅子吼集』『野干鳴』『衣内珠』等の著作があり、天桂系統でもかなり活躍した人と思われる。この『報恩編弁耕』には「近代魔子（牛庵道鑄）此の編を毀たんと欲す」（上巻）、「隨流斎（直指玄端）悟由の因縁」（上巻）、「螺蛤（天桂）恒に心仏衆生の初起の詮議有り」（上巻）、「老師（無画）有る時云く、先師（天桂）生涯此の話を以て学徒を試験す」（上巻）等の記述があり、当時の天桂門下の様子を知る上で貴重な資料となつてゐる。尚（）内は筆者註記。

④ この筆者所蔵の享保六年刊の『報恩編』の「書き入れ本」

とかなり近い内容の註記のある「書き入れ本」（駒大図書館、永久文庫四四八）も存在する。

⑤ この「五位大意」の中では主に中国臨済宗の朝宗通忍と永覺元賢の五位説が批判対象となっている。

⑥ 天桂は『五位顕訣』の「正位却て偏、偏について弁得すれば、是れ兩位を円かにす」の「円」を取り上げて「兩位を円かにするの円の字も、亦た是れ箇の中の義」『五位弁的』（一丁）と説明している。このように天桂は「正偏」の一体性を「中」や「円」として捉えている。

⑦ もう少しこの「中」について天桂の説明を聞いてみよう。既に引用したように天桂は「此の中は曹山の所謂る、中を犯すことを欲せざるの中にして、辺表無きの中、本然不動、名の名づく可き無く、曾て変易無く、強いて名づけて中と曰う」『五位弁的』（一丁）とする。つまり曹山の「中を犯すことを欲せざるの中」であると主張した。さらにこの語を説明し

中を犯すことを欲せざるの中は、所謂る正中妙挾の中、更に物有て之を犯すことを欲せざるには非ず、一切処動ず可く変ず可き無く、全く的的無きを仮に名づけて中と曰う、畢竟不動の義なり、蓋し偏正を以て言ひ者は犯さずして通ずるに在るのみ

『五位弁的』（一丁）

としている。天桂はこの「中を犯すことを欲せざるの中」に

天桂伝尊の「五位逐位頌」解釈（志部）

天桂伝尊の「五位逐位頌」解釈（志部）

ついて、「物有て之を犯すことを欲せざるには非ず」として物的なものを想定することを否定している。しかも「辺表無きの中」「変易無く」「動ず可く變ず可き無く」とし、最後に「畢竟不動の義なり、蓋し偏正を以て言う者は犯さずして通するに在るのみ」と述べている。

この天桂による「中」つまり「兼中到」の解説は中々難解である。前述の曹山や後曹山慧霞も共にこの「兼中到」を「兼帶」と表現し、有無、正偏の一方に偏らない点を強調している。結局「不動の義」や「犯さずして通するに在るのみ」等の語から推測して「正」と「偏」との一体性をそのまま造作を加えず理解する視点であろうか。いずれにしてもこの「兼中到」は偏正五位の中でも最も重要視されている。それは天桂が「若し格外の機有るときは、末上に兼到位を見て、始めより四位を見ず」『五位弁的』（九丁）と述べていることにも窺えるのである。

⑧ 天桂は『正法眼藏弁註』を著したが、その基本的注解姿勢は「縁起説」である。たとえば「現成公案卷」の冒頭における「有・無」も「因縁所生説」で解釈されている。拙稿「天桂宗学考」—『現成公案卷・弁註』における『御抄』批判とその背景—（『曹洞宗研究員研究紀要』第十九号、昭和六十二年）参照。天桂及びその系統の「縁起説重視」に注目しておく必要がある。

⑨ 江戸期にはこの「正中偏」の第一句目の解釈に相違もあつ

たようである。天桂の孫弟子の玄樓奥竜が「偏正論」『蓮藏海五分録』（『続曹洞宗全書』語録三、四五五頁、現漢文）で次のように指摘している。

是れ不見中、猶所見あるを示す、夫れ三更初夜は暗なり、不見亦た暗なり、月明前は明なり、所見亦た明なり、是れ暗中に明有るにあらざらんや、此の暗中明を以て、正中偏に比する者なり、古人往往、月明前を以て、月明以前の事と為すは謬りなり、此前は、面前、人前、月下風前等の前なり、もし月明以前と為せば、祇だ是れ一向の暗夜なり、毫髪も所見有る無し

玄樓は「月明前」の句を「月明以前の事」と理解することの誤りを指摘している。この「月明前」の「前」について「面前」「人前」「風前」等の「前」と同意だと主張しているのである。もし文字通り「月明以前の事」とした場合はこの句は「一向の暗夜」を表現したもので、「正中偏」の意味にはならないとしているのである。そして「三更初夜」を「暗」とし、「月明前」を「明」とし、「暗中明」つまり「正中偏」を表現したものとする。

上記のよう玄樓は「正中偏」の第一句である「三更初夜月明前」の語を意味の上から「正中偏」の大意（正偏回互）を表現したものとした。次の「偏中正」以下の「正中來」「偏中至」「兼中到」の各第一句もそれぞれの各位の大意を表現しているので、玄樓の主張も一応首肯されるのである。

(10) ここで参考までに天桂が『五位弁的』で推奨する曹山本寂、後曹山慧霞、丹霞子淳の五位説を記してみよう。

(1) 会元曹山草に、僧君臣の旨訣を問う、師曰く、正位は

即ち空界本来物無し、偏位は即ち色界万像の形有り、正中偏は理を背(棄也)事に就く、偏中正は事を舍て理に入る、兼帶は冥に衆縁に応じて諸有に墮ちず、染に非ず淨に非ず、正に非ず偏に非ず、故に曰う虛玄の大道、無著の真宗と、從上の先徳此の一位を推して、最妙最玄とす、當に詳審に弁明す、君を正位と為し、臣を偏位と為す、臣、君に向かう、是れ偏中正、君、臣を見る、是れ正中偏、君臣合道是れ兼帶の語と

『五位弁的』(五・六丁)

(2) 後曹山了悟大師慧霞、五位顕訣序略に曰く、曹山大師は乃ち新豊の嫡孫となるに泊んで、將に五位を明らかんとし、五篇を頒出して、兼ねて一例の言を挙げて、以て五門の旨を顯す、一には正位之を主と為す、二には偏位之を賓と為す、三には正位却て偏、是れ恁麼に來て位を顯す(是れ正中偏、正中来なり)四には偏位却て正、是れ恁麼に去て以て宗を明かす(是れ偏中正、偏中至なり)五には相い兼帶し来て、有無に渉らず頓に賓主を亡

ず、偏にあらず正にあらず、至妙至玄(是れ兼中到なり)或いは當頭にして来る、寧ろ語默に従わんや、或いは正面にして去る、豈に言詮に在らんや云々

『五位弁的』(六丁)

(3) 丹霞の淳、五位總序に云く、夫れ黑白未分、彼此を為し難し(本然無位)玄黃の後方に自他を位す(是れ兼到一位纔に彰わるなり)是れに於いて黒を借りて正を権り、白を假りて偏を示す、正、正に坐せず、夜半虛明(正中偏なり)偏、偏に坐せず、天曉陰晦(偏中正なり)全体即用、枯木花開く(正中來なり)全用即体、芳叢艶ならず(偏中至なり)兼帶を攜残し玄微を及(至なり)尽す、玉鳳金鸞分疎不下(兼中到、元是れ無位なることを明かす)是の故に威音那畔、如何と話ることを休めよ、曲げて今時の為に、人に由て施設す、略管見を陳べて以て方隅を示す、冀くは諸同志、幸いに掌を撫すること母れと

『五位弁的』(六丁)

以上が天桂の依拠した先人三者(曹山本寂・曹山慧霞・丹霞子淳)の五位説である。へ)内は天桂の注解。この三者の五位説は天桂の五位説理解の参考となると思われる。